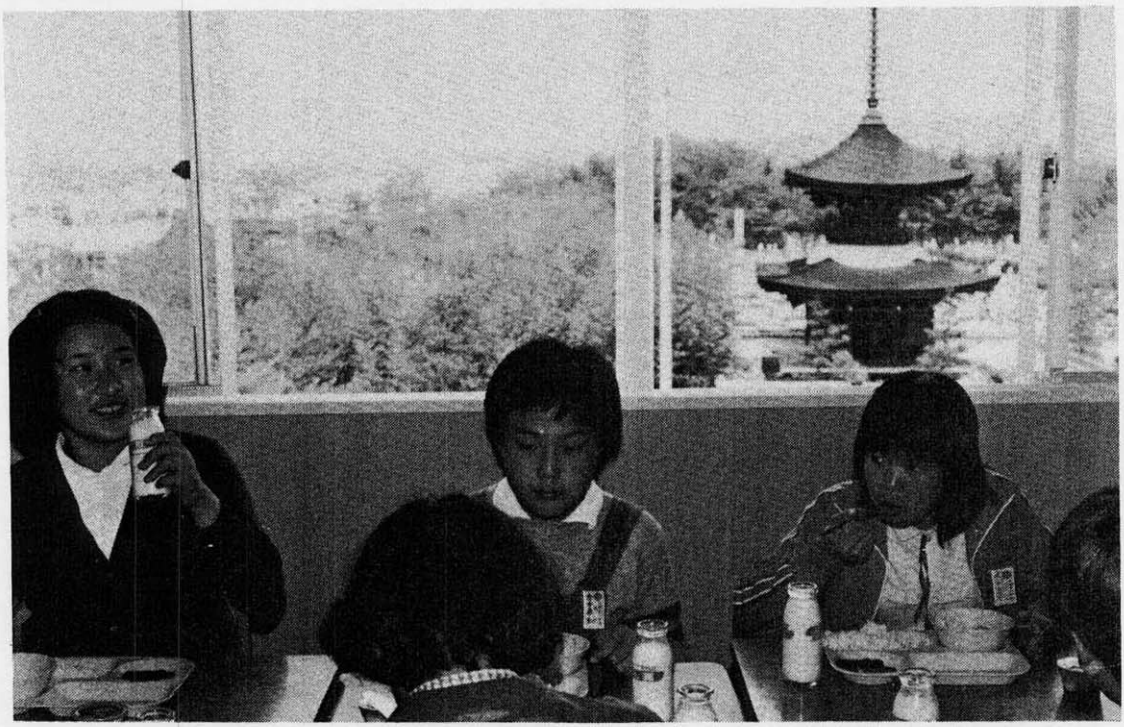
多宝塔の見える教室。
二月完工したばかりの
真新しい三階建教室の窓ごしに
村積山、猿投山も見える。
現代に息づく
歴史の輝きが
ここでは
不思議なほど調和を保っている。
五月の陽光の中で
米飯給食に舌ずつみをうつ
子どもらのひとみは
底ぬけに明るい。
大樹寺の森は
若葉に包まれている。

昭和54年5月1日
編集／発行
岡崎市教育委員会



多宝塔の見える教室で－大樹寺小

―― 教育随想 ――

自然に親しむ教育を

仲井　豊

大学に入って来た学生に、野外観察実習の経験の有無を尋ねると、無いと答える者が大部分である。じっくりと自然をながめ、実験、観察を充分取り入れた理科の授業を受けていたのでは、今の受験体制の中ではおちこぼれてしまうのであろうか。こんな学生は、いろいろな「ことば」は知っているが実体をまるで知らない。例えば、岩石や鉱物の名前はいえるが、どんな物であるかを知らない。標本を見たこともなければ、まして野外での産出状態も知らない。

自然に触れて学ぶことのよいことのひとつには、豊かな発想を育むことができる点であろう。干からびた知識だけを覚え込むだけでは豊かな発想は生れない。いうまでもなく自然科学は自然について学ぶ学問であって、理科教育においても自然を学ぶことがもとになければならない。恩師の酒井榮吾先生がよくいわれたことであるが、「教壇に立っている教師は決して先生ではなく、自然こそ真の先生である」ということを教育に携わるものは充分かみしめなければならない。

教育とは「まず感動を与えることであろう」と井尻正二氏はいっているが、全く同感である。教科書にあるような知識だけを覚え込ませるだけでは、決して教育ではない。そこからは感動もわかないだろう。ほんとうの教育は、子どもの可能性を引出すことにある。このためには教師は子どもにいくつかのチャンスを与え、条件を整えてやらなければならない。

自然が破壊されるので、自然を守らなければならないとよくいわれる。守るべき自然とは一体何であろうか。人間は地球上に生息し、自然に働きかけ、自然から恵みや災害を受けながら今日に至っている。要するに、自然は我々の生活の基盤であり、自然を抜きにして人間の生存は成り立たないのである。「自然保護」は人間が自然に働きかけるのをやめて、自然をそっとしておくことではなく、人間の生活にとってよりよい自然を確保していくことである。このような「自然保護」をするためには、一体どうしたらよいのだろうか。人間の住む環境をよりよくし、かけがえのない地球を守っていくためには、まず自然についてよく知ることが必要である。しかもこのことを一部の専門家に任せておくのではなく、人間として一人一人が自然について学び知ることが今日では必要となってきている。自然を知らない人間は、自然のみならず人間自身をも守ることができないともいえるだろう。

恵まれた岡崎の自然を愛し、よりよい郷土を造っていくためには、まず岡崎に住む人達が郷土をよく知ることから出発しなければならない。

自然を離れた理科教育が、これ以上はびこらないようにするために、お互いに注意していきたいものである。

（愛知教育大学教授）

心のぜいたく

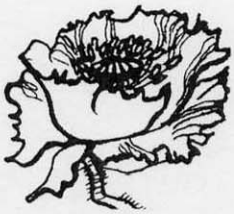
三浦みどり

連日の疲れに麻痺した頭脳と自信たっぷりの体と海外旅行者らしからぬ小さなバッグを肩に『のんびりしてくるぞ。』と出発。『ほんとに行けるの。』疑惑のまなざしも、そこは岡崎の先生。度胸と係分担の完璧さでバッチリ。

英会話は小野田先生担当。しかし、度胸で話すのは山本先生。三日目の夜。ホテルの廊下で外人の女の人がペラペラ。鍵があかないらしい。ベネズエラ人でエスペラント語らしい。わからん人が集まってのペチャクチャも流暢に。ホテルの人を呼んで一件落着。

会計は牧先生担当。レストランでの4%の税金と15%のチップも電卓片手にハイOK。毎日の小遣い帳もピタッとあう。

テニスと泳ぎは私の担当。早朝の無料テニスコート。地元の人が美しいユニフォームで優雅にボールの弾みを楽しんでいるのを気にせず、短パンで、あちらへ走り、こちらへころがる。ワイキキの浜



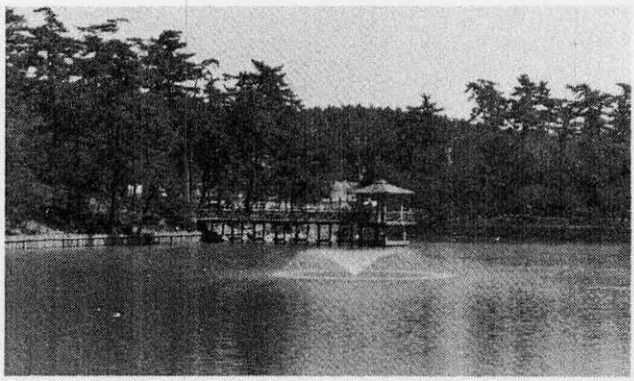
ふるさとの山河

東公園

東公園は市街地の東端の丘陵地帯にあり、美濃三河高原の末端部に位置する。公園中央には、郷土が生んだ偉人志賀重昂ゆかりの釈迦堂、東天竺山世尊寺や南北亭がある。又大小いくつかの沼沢をたくみに生かしたこの公園は、春の桜、初夏の菖蒲、秋の紅葉と四季それぞれにあでやかな姿をみせ、訪れる人々の目を楽しませてくれる。

この公園が風致絶佳といわれるのは、ここに大小いくつかの池が点存しているからである。これらの池は、明治以前に灌漑用池として作られたものである。この公園の南一帯は、かつて「根石ケ原」と呼ばれた洪積台地であり、そこに水田を開くためいくつかの池が作られたのである。

土地の古老の話によれば、大池（足延池）はかつて「米びつ」といわれ、欠や洞の水田二十町歩（二十ヘクタール）を潤していたという。このような大事な池であったため、江戸時代には十年に一度程、岡崎藩士の指揮のもとに、近存のお百姓が総出で、馬おけを使って底ざらえをしたという。しかし、宅地化が急速に進む現在では、わずかに残っている水田に建つ記念碑だけが、往時をしのばせている。



これらの沼沢を含むこの一帯が、公園として指定設置されたのは、昭和三年四月という。四年に世尊寺、南北亭などが建てられて以後、あまり大きな変化はみられなかった。その後、本腰を入れて開発が再開されたのは昭和三十五年からであり、近年特に公園整備が進められている。

完備された駐車場から管理棟を経て、なだらかな坂道を登ると池が目にはいる。手前のが鳩ケ池、後方が足延池である。白鳥やアヒルがのどかに水辺に遊び、足延池にかかる浮御堂は、まさに一幅の絵をみるごとくである。小道を右に折れると菖蒲池（ひょうたん池）の北に南北亭が静かなたたずまいを見せる。初夏ともなれば池越しに菖蒲の花が周囲を紫に染める。池の端を通り、坂道を上ると移築された本多光太郎博士の勉強部屋に至る。さらに公園を縦貫する東名高速道路をまたぐ「男の子橋」を渡り、遊歩道を進むと中腹に志賀重昂の三河男児の歌碑が、石都岡崎を象徴するかのように堂々と建つ。ここに立ち眼下に市街をのぞむと、歌碑の一節とも相まって、心引き締まる思いもする。

その公園内には近藤孝太郎・藤井達吉の歌碑、児童公園。展望台。オリエンテーリング、マラソンコース等が設けられ、岡崎新総合計画にいう〝自然と文化の公園〟づくりが着々と進められている。

（根石小　上川清玄）

べでは、岩中で誇った肢体も形なし、圧倒されっぱなし。『少しスマートになったかしら？』の期待の声も錯覚なのだ。

多忙な毎日を送る人たちに、青い海と太陽のハワイの休日を岩中四人の女教師から勧めます。

（岩津中）

台湾あれこれ

原田和幸

台湾には代表的な中国料理のすべてがあり、しかも格安で味わえる。たまにはゲテモノと思われるものも平然と皿にのったりする。栄養豊富で油っこいと敬遠されるむきもあるが、女性は皆スマートで年配の人も若々しい。

信号の少ない町中をポンコツ車がわがもの顔に走る。車優先であるから歩行者は要注意である。林立する看板の文字は目を楽しませてくれる。漢字のお国柄だけあって書風も格調高く、さながら展覧会場にでもいるような錯覚におちいってしまう。

訪問（書道使節団）先の学校では熱烈な歓迎を受けたのであるが、アメリカとの縁切れから次第に孤立化を深める台湾には、かつての戦中の日本の姿があった。質素な教室環境、学習用具。一時間に習字紙一枚の使用は、まさに倹約を地で行くものであった。国をあげての耐乏生活。しかし、意外と明るい子どもたちの表情に救われるものを感じた。

（本宿小）

世界の子ども達

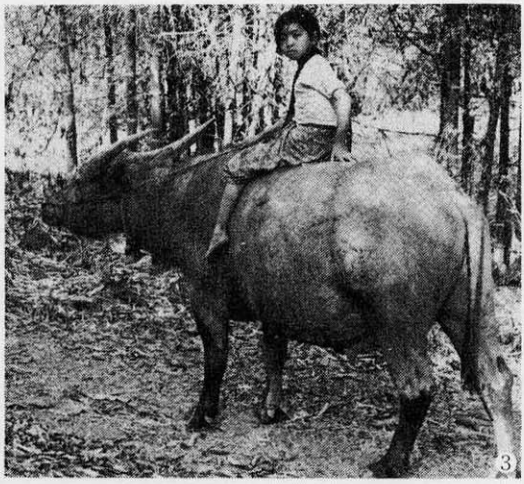
ビルマ・マレーシア

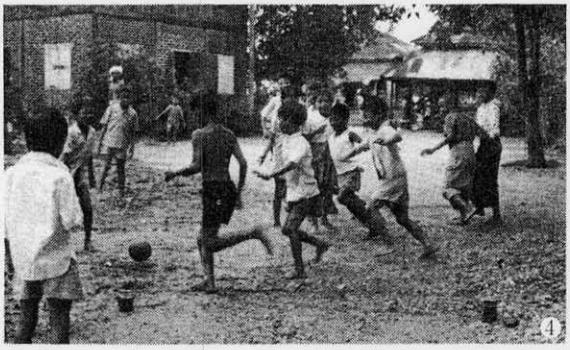
ビルマの風俗、習慣あらゆる事は、仏教が母体となっている。子どもたちは朝五時には起き、どこの家々でもお経を暗記し、大声で唱えている風景をよく見かける。

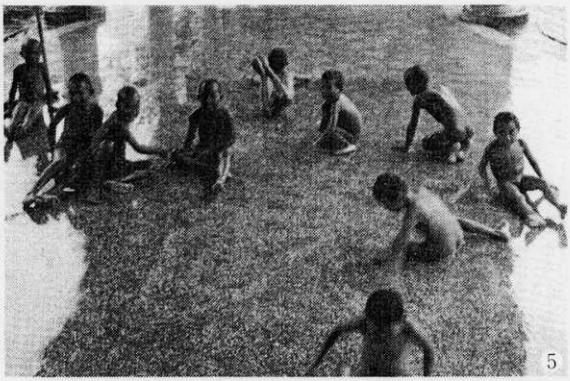
ビルマ人はお祭りの好きな国民でもある。水祭、火祭を中心に自然を対象としたものが多い。いずれも二日も三日も夜じゅう歌い、踊りまくるのである。どこにこんなエネルギーがあるのかと驚く。

子どもたちはジャングルのような熱帯の木々の中をくぐり抜け、ヤシやマンゴーの木々に登り遊んでいたかと思うと、泥んこの川で泳ぎまくり、また、のんびり水牛の背に乗り、自然の中で思う存分に遊ぶ。遊びと言えばチンロンというビルマ独特の蹴まりがある。五・六人が輪を作り、籐製のマリを蹴って地上に落ちないように蹴り続けるのである。足のつま先、甲、ヒザを使い、時には後ろを向いて蹴っても球は落ちない。実に巧みである。そのためかサッカーの好きな国民でもある。子どもたちは空地や大通りの静かな一角を占領して遊ぶ。車の少ないビルマならではである。自動車の方がよけて、にこにこ挨拶しながら通り抜けるのに驚く。実になごやかな風景である。

（六ッ美中　松井幸彦）







マレーシアはマレー人、中国人、インド人の複合民族国家で、それぞれの民族が、民族の伝統をうけついで、そのしつけも種々である。概して中国人はしつけが厳しい。お客の前でも容赦しない。悪ければ隣りの子でも体罰を下す。それがもとで親どうしの派手な口論に発展することもあるが翌日にはケロッとしている。

これと対称的にマレー人はいたってのん気である。親も子ものんびりとした生活で、小さいときから親の仕事の手つだいをしながら、自然に生活のし方や社会性を身につけていく。インド人の子でもこの点では同じである。いずれにせよ、宗教がそれぞれの生活に浸透し、その考え方がしつけの差にあらわれているようである。

子どもの遊びは、日本の子とよく似ている。凧あげから、コマまわし、それにビー玉までよく似ているが、大人も子どももいっしょに遊んでいる点がやや異る。夕方涼しくなりかけると戸外に出て、活気が溢れる。部落によっては民族の踊りを楽しんでいる。しかし妙にはしゃぎ回る子が少ないのは、やはり常夏の国のためだろうか。どの子もどの子も、静かにニコニコして愛きょうはいい。子どもらしくないと表現したらマレー人の先生から「どうして日本の子はあんなによくしゃべり、よく動くのですか」と逆しゅうされてしまった。

（梅園小　内藤広光）

〈ビルマ〉

① ヤシの実をとる子ども
② 水祭り。若い男女が水をかけ合って楽しんでいる
③ 水牛の背に乗って……
④ 路上でサッカー遊び
⑤ スコールのあと。水にぬれた坂を裸ん坊ですべって遊ぶ
⑥ ドラムかんを利用して、飲み水を運ぶ子ども達

〈マレーシア〉

⑦ しし舞い
⑧ ちびっ子愛煙家
⑨ 中学生くらいになると、親といっしょに仕事をする

教育日々

クラブと私

井田小　**佐々木ひろみ**

「先生、今朝はおそいねえ。」

「あっ、ごめん、ごめん。」

職員室前で待っている子にかぎを渡す。

うれしいことに、子どもたちはこの頃ようやく自主的に練習に来るようになった。

腹筋三十回、足あげ一分を三回、「アッ　アッ　アッ……」と発声練習の声が、朝の体育館に響く。この子どもたちを見ていると、(このやる気にこたえるために……。こたえられる限りのことをしなければ)と思う。

井田小の合唱部を受け持って四年たった。

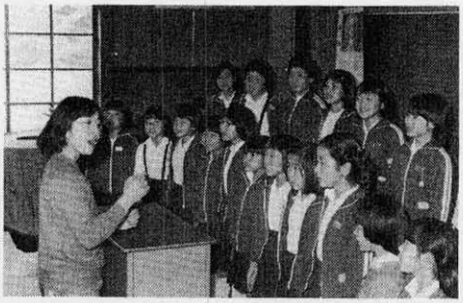
一年目――新卒で何もできなかったし、なれるのに精いっぱいだった。

二年目――まわりの事はいろいろわかったが、ひとりひとりのことがつかめなかった。

三年目――自分の担当学年の四年生がクラブに入り、ひとりひとりのようすがだいぶわかった。

四年目――「今度もママさんコーラスやるんだね。たいへんだ。でも、やらせてもらえるということは、ありがたいことだ。やりたくても機会のない人もいる。」と、ある先生に言われ(クラブをやらされている)という気持ちが消えた。

一つのことに打ちこめることはしあわせなんだと思えるようになった。



合唱指導は、ただ『歌を教え、うまくする』ことだけではない。歌を通し友だちと、教師との心のつながりを知ることではないだろうか。

また、コンクールなどに出場する時、自分を支えてくれる人たちの見えない大きな力にも感謝しなければならないと思った。

これからも、私についてきてくれる子どもたちのため、全力を出し努力していきたい。

きのこの贈り物

美川中　**鈴木　忍**

T夫は精神薄弱にテンカン発作を併せ持つ重複障害児である。二年かかって、やっとひらがなの読み書きができるようになった。性格は底ぬけに明るいが、たまに学校内で発作を起こし、保健室で看護を受ける時がある。彼の場合、大発作をいきなり起こすことはなく、その前になんらかの前兆のあることが普通である。養護教諭のM先生に付き添ってもらいながらも、不安な顔つきで変調を自覚している彼を、なんら手だてのないまま見守るのは、看護する方にとってもつらいことである。そんなことが二、三度あり、彼はM先生をたいへん慕うようになった。

二年八組(特殊学級)では、作業学習に重点を置いた指導をしている。委託生産、職場実習陶芸、キノコ・野菜の栽培等。体を動かすことによって学習を展開し、広げ深めて行く。

秋のある日、ヒラケタ(通称シメジタケ)の人工栽培に成功し、収獲できるようになった。初物は、まず、学級のみんなで食べることにし、わずかずつだが銘銘の家へ持ち帰って、家族の人達と食べることになった。

ところが、T夫だけは、持ち帰らずに、職員室のM先生の机の上に、だまってころがすように置いて家へ帰ってしまった。翌日、T夫に

「いらないんなら学級の子にあげりゃあよかったじゃないか。みんなほしがっていたのに。」

と問い質した所、ポツリポツリと言いにくそうに答えはじめた。

「ボクねえ、時々、M先生に世話になるだらあ。ほんで。」

「えっ、世話になるって、なんのことだあ。」

「うんとねえ、あの時……。」

そのことばを聞いた時、はじめはなんのことかわからなかった。しかし、すぐに胸にズキンと痛みを感じた。「しまった。」

T夫ははじめてとれたキノコを、家族よりもだれよりも、M先生に食べてほしかったのだ。今までずっと、何かでお礼の気持ちを伝えたいと、彼は思い続けていたのではなかったのだろうか。でも、彼は意志を伝えるのにそれほど器用ではなかったし、彼の手元には若いM先生にふさわしいものは何もなかった。

何も言わずに、机の上にキノコを置いて行くのが、彼に出来る精一杯の行為だったのだ。

今年はヒラタケのほかに、四種のキノコが出てきそうである。

おしらせ

【寄贈刊行物・資料等】

◇集会活動――実践記録――

現職教育委員会特活部編

教育課程改訂にともない、特活の大前提である「集団活動の充実」をめざした実践研究の記録である。各校における特活の充実手引き書。A5版七頁

国際児童年記念事業

太陽の城 開館

二十一世紀に生きる青少年の健やかな成長を願い、国際児童年記念事業として建設された〝太陽の城〟が、菅生川に堂々たる威容を映して開館しました。これは、児童の校外活動の場としての児童センターと、青少年の健全な余暇活動・芸術文化活動の場としての青少年センターの機能を併せもつ青少年の殿堂として誕生したものです。このたび、りっぱに完成し、いよいよ開館されましたが、今後の運営にあたりその機能が十分に発揮され、大きな成果があがるよう期待されています。

太陽の城 あらまし

- 敷地面積　2,356㎡
- 建物面積　1,972㎡（1F・409㎡　2～5F・1,563㎡）
- 構　造　鉄筋コンクリート5階建
- 総事業費　513,464,000円

内容

1F	児童センター	▶遊戯室、集会室、図書室学習室等
2F	青少年センター	▶視聴覚室・集会室 ▶音楽ライブラリー（ヘッドホーン6系統24人試聴可、レコード・テープ約2,000） ▶研修室・体育室等
3F 4F		▶ステージ付音楽ホール（3・4階吹抜、300余人収容可・マイク16本、20系統の調整卓）
5F		▶音楽ホール・研修室

利用　日・祝日：午前9時～午後9時
平日：午後1時～9時（児童センターはいずれも午後5時まで）

休業　日・祝日の翌日・市制記念日・年末年始

利用方法　所定の申請書で利用許可を受ける

第6回

岡崎市民大学の開講

岡崎市民大学も六回目を迎えることができました。今年も著名な講師をお招きして、左記のように開講します。

皆さんの聴講をお待ちします。

◆期日と講師

①**7月22日**(日)
慶応大学医学部教授
理学博士・医学博士
渡辺　格氏
・生命科学の進歩と人間の未来

②**8月5日**(日)
立教大学文学部教授
文芸評論家
小田切　進氏
・文字の魅力

③**8月12日**(日)　市民会館
作曲家（本宿町出身）
冨田　勲氏
・シンセサイザーの可能性について

④**8月19日**(日)
中日釣魚会連合会長
三浦　秀文氏
・釣と人生

⑤**9月2日**(日)
評論家
秋山ちえ子氏
・このごろ思うこと

⑥**9月9日**(日)
シナリオライター
松山　善三氏
・見えないもの・聞こえないこと

◆会場　岡崎勤労会館（第3回講座のみ市民会館）

◆開講時間　午前9時30分受付
開始　10時開講　12時終了

◆会費　1,000円（講座ノート、資料等の実費）

※一講座ごとの受付けはいたしません。

■市教育委員の学校訪問

▽5月24日（木）午前―藤川小　午後・山中小▽6月28日（木）午前―根石小・午後―常磐南小▽9月27日（木）午前―三島小　午後―美合小▽11月29日（木）午前―甲山中・午後―矢作中▽1月24日（木）午前―竜美丘小　午後―広幡小

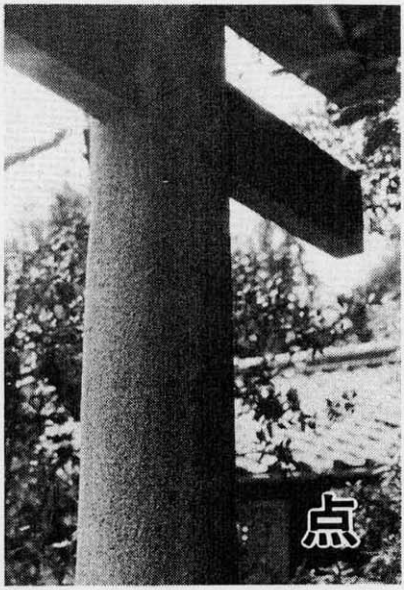
■県教育委員会主事の学校訪問

▽5月28日（月）羽根小・義務教育課間瀬主事▽11月14日（水）岡崎小・義務教育課定盛主事▽11月22日（木）梅園幼・義務教育課新帯主事▽11月26日（月）井田小・葵中・教職員課渥美主事▽11月28日（水）竜海中・義務教育課伊庭主事▽11月29日（木）美川中・義務教育課太田主事

■54年度月報編集委員

- 大野　洋鵬（岡崎小長）
- 佐々木秀芳（竜谷小長）
- 和出　昭夫（六北小頭）
- 畔柳　正弘（河合中頭）
- 柴田　鏸三（大門小）
- 高橋　岩雄（甲山中）
- 大山　礼司（香山中）
- 清水　弥生（根石小）
- 嶋田　稔（城北中）
- 加藤　憲尚（福岡小）
- 岩月　健（広幡小）
- 八田　昌子（大樹寺小）
- 牧内　映雄（六ツ美中）
- 竹内　昭次（六名小）
- 柴田　隆夫（葵中）
- 金子　一元（竜美丘小）
- 杉本　佳子（東海中）
- 野々山周次郎（岩津中）

流転の鳥居



所在地－岡崎市六名町

市史によると、明治初年、岡崎城内の英世神社と東照宮とが合祀され、龍城神社となったとある。この時、東照宮は鳥居付き三十円で売りに出された。

当時、中六名村の村民が、大庄屋斉藤氏から三十円を借用してこの社殿を買い取り、村の鎮守さま熊野神社の社殿とした。小さな子供まで動員して、村中総出で材料を運び出したという。

この東照宮の社殿は、現代も熊野神社の建て物として残っている。葵の紋の瓦葺き、小ぢんまりしているが立派な建て物である。

ところで、鳥居の方は、そこにはなく、真宮遺跡で有名になった下六名町真宮神社の社殿の隣に祀られている天神様の鳥居になっている。表には奉納者である時の家老の名が、裏面に『東照大権現宮』の文字が彫られており、どう考えても表裏逆である。しかも、ご丁寧にセメントで文字がうめられている。明治政府をはばかったか、三十円の借金を気にしてか、江戸三百年の栄華の末路を語るが如く、ここにひっそりとたっているのである。

●カット　六ツ美南部小　加藤まち子

オアシス

オールドファッション、また甦る。今、流行のハイヒール。彼の背丈を気にしながらも、これを履くとちょっぴり大人になったようで嬉しかったっけ。

バスの中で、足をキュッと踏まれた時の痛さは今だに忘れられない。ツンと澄したキツネのようなあの顔も。みなさん、ご用心、ご用心。

新緑の季節だ。今年は全国植樹祭が愛知県で開催される。

「みかわくろまつ」が市の木ということは誰でもすぐ言えるが、準市の木となるとちょっと戸惑う。「いちょう」「けやき」「くすのき」「くろがねもち」がそれ。ついでに市の花は「ふじ」、市の鳥は「ハクセキレイ」もお忘れなく。

あやめ、花しょうぶの花が露に濡れて美しい。色も白、紫、藍、空、紺、桃色などがあり、花の姿も、絞り、ふきかけ、覆輪とさまざまだ。

かきつばたは業平の歌で有名だが、水辺にはこの花がよくにあう。

雨をふくんだぼたんの花はなまめかしく、艶やかで風情がある。

すかんぽの花に合う音は、けりの鳴き声。

こいのぼりの矢車の、しゃにむにカラカラまわる音。

スズメノヤリの草笛。

学校帰りの一年坊主がレンゲをつみつみ歌う声。

ブルドーザーの音には合わん。

この本を

○私の文章修行	週刊朝日編
朝日新聞社	¥ 1,100
○江戸意外史	根本順吉他
文化出版局	¥ 700
○円の挑戦	日本経済新聞社編
日本経済新聞社	¥ 850
○二流の愉しみ	山本 夏彦
講談社	¥ 980
○妻の心	羽仁 説子
岩波新書	¥ 360
○主家滅ぶべし	滝口 康彦
文芸春秋	¥ 980
○スコット	ピーター・グレント
草思社	¥ 1,800
○書物漫遊記	種村 季弘
筑摩書房	¥ 1,500
○国宝・重要文化財案内	毎日新聞社編
毎日新聞社	¥ 2,000
○教育探険	広中 平祐
日本放送出版協会	¥ 650